Heart Beauty Salon

サトリのココロ

多くの人が孤立感、生きにくさを感じる今、
仏教に興味を持つ人が増えています。
僧侶に聞く、弱い自分と向き合う方法——

目に見えない不可思議にこそ仏様の教えが隠されています

日蓮宗蓮久寺住職
三木大雲さん

第57回

みき・だいうん　1972年生まれ、京都府出身。京都市の寺院の次男として生まれる。実家の寺は兄が継いだため、立正大学仏教学部卒業後は各地を流浪。2005年より蓮久寺の住職に。寺の法務のかたわら、講演や執筆活動、テレビ出演なども行う。怪談をベースとした説法が話題となり、“怪談和尚”の異名も。関西テレビのオンデマンドで三木大雲の番組が配信予定。

私は京都のお寺の次男として生まれました。兄が跡を継いだため、私には継ぐお寺がありません。東京の大学を卒業後、私はいろいろなお寺で修行を積みました。そのかたわら、夜の公園で布教を行っていました。相手は公園にたむろする不良や暴走族たち。ただお説教したのでは話を聞いてもらえません。そこで私はこう話しかけました。「むちゃくちゃ怖い話があんねんけど、聞かへんか？」

このひと言に興味を持ったのでしょう、彼らは私の周りに集まってきました。最初は怪談話ばかり。それから徐々に、怪談を通して仏様の教えを説くお説法に。こうして私の〝怪談説法〟スタイルができ上がりました。

単なる怖い話ではなく、わかりやすく仏教を説くのが私が目指す怪談説法。説法を聞いた方が「明日お墓参りに行こうかな」「毎日しんどいけどがんばろう」と思ってくだされば僧侶として本望です。

怪談話はすべて実体験をもとにしています

私の怪談話はほぼすべて、自分で体験したり、相談を受けたりしたことです。たとえばこんな——

あるとき、身寄りのないおばあさんの骨壺を引き取ってほしいと依頼を受け、お寺に持ち帰りました。お骨は長いこと放置されていたようで、私は本堂で供養のお経をあげ、長い間寂しかっただろうと、普段より長めのお線香をあげました。しばらくして本堂へ戻った私の目に飛び込んできたのは、お線香の煙を両手で口へ運んで食べている老婆の姿でした。

実は仏教には「香食（こうじき）」という言葉があります。文字どおり「香りを食べる」という意味で、亡くなった方にとってお線香の香りは食事のようなものなのです。

お線香の香りを一心に食べている老婆を見たとき、私の頭にはこの「香食」という言葉が浮かびました。長年、誰からもお線香をあげてもらえなかった老婆の寂しさ……。生きている人間でも誰にも認めてもらえなかったら寂しいでしょう。亡くなった人ならなおさら、誰にも思い出してもらえず、焼香してもらえないのは苦しいはずです。亡くなった人を思い出し、「どうぞ食べてください」とお線香で供養することは大切なのです。

仏様のお陰で生かしていただいています

私は縁あって蓮久寺の住職になりましたが、それまでは継ぐお寺も見つからず、極貧生活を送っていました。自分が生まれてきたことすらも恨み、「私は仏様に嫌われている」と思ったこともあったほどです。でも今、こうして住職となり、テレビなどへも出させていただいている。やはり仏様は見てくださっていたのだと思います。

「今が不幸だ」と嘆く人は「今まで幸せだった」のです。苦しいことがあったら、一致し方ない」とまずは受け入れましょう。あとは仏様がうまくしてくださいます。

左／2011年に出版された『怪談和尚の京都怪奇譚』（文春文庫）ほか著書も多数。右／関西テレビの『怪談グランプリ』に出演し、2010年、2013年に準優勝。2014年には優勝した。

撮影／光川十洋　取材・文／本木頼子　デザイン／黒田志麻